神戸新聞 2015年08月07日 金曜日 面名 朝一社 １４ 29ページ

悲惨な記憶 語り継ぐ

広島「原爆の日」

逆立つ髪 垂れる皮膚―生き地獄

兵庫の2人ら50人「伝承者」が活動

原爆投下を直接体験していない人が、被爆の経験を次世代に語り継ぐ。広島市の「被爆体験伝承者」が4月から始動し、兵庫の2人を含む男女50人の伝承者がこれまでに252回の講話を重ねてきた。被爆者の高齢化が進む中、体験していないことを伝える難しさを感じながら、原爆の恐ろしさと平和への願いを自らの言葉で語っている。

被爆体験証言者の梶本淑子さん（中央）から70年前の話を聞く、大田孝由さん（右）、中村裕美さん＝広島市中区中島町１、平和記念公園

「被爆者だった母親の話を十分に聞けなかったことが心残りだった」。被爆2世の伝承者大田孝由（たかよし）さん（68）＝奈良県生駒市＝は、証言者の梶本淑子（としこ）さん（84）＝広島市＝に母の面影を重ね、時には爆心地となった同市内をともに歩き、生き地獄と化した市街地の情景を聞き取った。

梶本さんは14歳の時、爆心地から2・3キロ離れた軍需工場で被爆。自身も負傷したが、がれきの中から友人を助け出して担架で運んだ。その途中、髪を逆立て、両手の皮膚をぶら下げたまま市街地をさまよう被爆者の姿に言葉を失った。

梶本さんを捜しに爆心地に来た父は1年半後に病死。被爆した母の治療費を稼ぎながら3人の弟を育てた。

「こんな残酷な経験、他人に引き継ぐなんて無理だと思った」と梶本さん。それでも「今ここで私が話さないと、平和を願う原体験が失われるのではという危機感があった」と参加の動機を語る。大田さんが母と向き合う姿を見て、梶本さんの次女中村裕美さん（55）も伝承者の候補者として、母の被爆体験に耳を傾けている。

「文字や音声と違い、面と向かって語ることは、平和に懸ける願いがもっとも伝わる手段」と大田さんは伝承者の意義を説く。

◆

明石市在住で、被爆3世の会社員高岡昌裕さん（36）は「当初は『体験していないことを話せるのか』という疑念があったが、何度も話を聞くうちに『伝えなければ』という使命感に変わった」と振り返る。3年間の研修中、2人の被爆者のもとに30回以上通い、原稿を練った。

7月中旬、秋田大で約40人に向けて被爆者の経験を語った。「淡々と話すのがいいのか、演じた方がいいのかまだ分からない」と模索を続けるが、「受け継いだ悲惨な体験と平和への願いをさらに子どもたちに伝えたい。二度と、被爆者と同じ思いをさせないために」と力を込めた。

（井上 駿）

被爆体験伝承者事業　広島市が2012年度から養成を開始。3年間の研修で原爆被害の実相や話法を学んだ後、被爆者の体験や証言を引き継ぎ、平和記念公園を訪れた修学旅行生や外国人らに講話する。15年4月に30～70代の1期生50人が認定を受けた。広島市内が35人と最多で、兵庫県内は2人。被爆2世や3世が大半を占めるが、周囲に被爆経験がない人もいる。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。